

ウガンダ共和国西部における HIV/AIDS の農村労働力に対する影響

平成 25 年入学
派遣先国:ウガンダ共和国
中澤 芽衣

キーワード:アフリカ、農村、家族形態、女性世帯、農作物、性的役割分業

対象とする問題の概要(400 字)

ウガンダ共和国は、国内総生産(GDP)の約 45%を農業が占めており、紅茶やコーヒー、綿などの換金作物のほか、トウモロコシやプランテンバナナをはじめとする食料作物が栽培されている。ウガンダの農業は国土の気候や土壌と関係し、北部ではシコクビエやキャッサバ、ソルガムなど、東部では牧畜をともなうトウモロコシ、中央部ではプランテンバナナ、南西部では冷涼な高地におけるジャガイモや野菜の栽培がさかんである。農村地域では、男女の役割分担が明確である。女性は耕起や播種、除草、収穫作業といった農作業をおこなし、女性の役割は大きい。また、水くみ、薪集め、食事の準備、育児といった家事も女性の仕事である(Bibangambah,1996)。

一方、ウガンダでは HIV/AIDS の感染者の増加が問題である。ウガンダ政府は 1991 年に HIV/AIDS の問題を国家の最重要課題と位置づけたが、それはサハラ以南アフリカの国々にのなかで、初めての試みであった。1993 年の HIV 感染者は 18%であった。ウガンダ政府の取り組みもあって、2012 年における 19 才から 49 才までの年齢層における感染率は 7.2%であり、1993 年のピーク時と比べると低下しているものの、2006 年の感染(6.4%)よりも上昇している。一方、ウガンダの人口増加にともない、感染率は低下していても、感染者そのものの人数は増加しつづけている。毎年、あらたに増える感染者の人数は 6 万人ほどと推定されている。ウガンダにおける HIV/AIDS の感染者の増加は、男女の労働力を組み合わせた農村社会の労働力にも大きな影響を及ぼしていると思われる。

研究目的(400 字)

本研究は、ウガンダ共和国の南西部に位置するルウェンゴ県の農村において、世帯の構成に着目しながら、どのような営農形態をとっているのかを明らかにすることを目的としている。この地域は丘陵状の土地であり、人びとは丘陵上の斜面に家屋をつくって生活している。丘陵の山頂付近は草地となっており、ウシやヤギなどの家畜の放牧地となっている。その下部にはトウモロコシ畑、そして、その下部にはプランテンバナナ畑が広がっている。夫と妻、子供を単位とする核家族を中心に世帯を構成し、それぞれの世帯が各家屋に居住している。一軒ずつの家屋は散在しており、プランテンバナナ畑に囲まれている。

農村には、いろんな構成の世帯が存在する。夫、妻、子供といった核家族の世帯、夫妻に子供、夫または妻の両親が同居する世帯、男性とその子供だけの世帯、女性とその子供だけの世帯、老齢夫婦のみの世帯といったように、世帯ごとによって、その構成はそれぞれである。夫婦の両方がそろっていない場合、死別あるいは離婚なのか、現時点では明らかではないが、家族形態の違いが営農方法、とくに農作物の種類数に与える影響について明らかにする。

フィールドワークから得られた知見について(800字)

2013年9月1日から11月1日までの2ヶ月間、ウガンダ共和国において現地調査を実施した。そのうち1ヶ月をウガンダ国内の広域調査を実施し、調査地の選定を試みた。残りの1ヶ月をウガンダ南西部に位置するルウェンゴ県のC村に滞在した。C村は近隣のL町より5kmの距離にあるが、車道がないため、住民は徒歩で町へ出る必要がある。C村に居住するAさんの協力のもとで現地調査を実施した。

Aさん(52才)には、現在の妻Fさん(30歳)とのあいだに4人の子供—長男(6才)、次男(5才)、長女(3才)、次女(1才)がいる。その4人の子供のうち、長男と次男、長女は、近隣のL町に居住するAさんの妹の家に居住し、小学校と幼稚園に通っている。ふだんは、Aさんと妻、次女がC村の家に居住している。

世帯Aの一日の生活の流れを以下にみていこう。AさんとFさんは6時30分に起床したのち、低地に放していた牛を柵のなかに集め、駆虫剤を牛の体に散布する。自宅に戻り、てっとり早く朝食をとり、8時すぎから耕作地へ妻とともにいき、3時間ほどインゲンマメとトウモロコシを播種した。正午まえに2人は農作業を終え、妻は自宅で料理にとりかかる。この世帯Aでは、農繁期において、昼と夜の2回の食事を同時に調理する傾向がみられた。この村の主食はプランテンバナナ、キャッサバ、トウモロコシ、コメなど複数が存在するが、すべて長時間、蒸す・煮るなどといった過程を必要とする。そのため、料理が完成するまでに3~4時間を必要とし、普段の生活では午後3時、ないしは4時ぐらいに昼ご飯をとっていた。

つぎに、C村に居住する37世帯に対して、農作物に関する聞き取り調査を試みた。調査した世帯のなかで、年長者の世帯、女性世帯では、作付けする作物の種類数が少ない傾向があった。世帯Aでは10種類(プランテンとスイートバナナ、トウモロコシ、キャッサバ、サツマイモ、ジャガイモ、インゲンマメ、コーヒー、マンゴー、ジャックフルーツ)と多くの作物が栽培されていたが、世帯B(65歳の女性世帯)では2種類(トウモロコシとインゲンマメ)のみであった。世帯の労働力が少なくなるにしたがって、作付けされる作物数が減少する傾向があった。

今後の展開・反省点

わたしが調査地を選定し、村入りした直後に、HIV感染といった住人のプライバシーに関わるような調査を進めていくことが、今回のフィールドワークを通して、非常に難しいものだと痛感した。今回の調査を通して、人々がHIVの感染を知った後、どのような場でどのようなケアを受けているのかについては未だに不明な点が多い。とくに町から離れた村においては、どのようにして感染者はARV(抗レトロウイルス薬)を手に入れているのだろうか。また、農業を生業にしていた場合、体調がすぐれないときにどのようにして耕作地の手入れをしているのか。などとHIV感染が日常生活内にどのような影響を与えているのか未だにはっきりとしていない。このような点を明らかにできるよう、現地調査をすすめていきたい。

